

長野県方言の代表語「ずく」の総合的研究

大橋 敦夫

OHASHI Atsuo

要約 長野県方言の代表語である「ずく」についての総合的な研究を行なった。考察の観点
は、その語源・語義・派生語・日常生活での活用の4点である。その結果、次のような結論を
得た。

- ①語源については、諸説あるが、「術（じゅつ）」説を支持する。
- ②語義は、意義の核として、「勤労を尊重する気持ち」があり、これをもとに派生語が生みだ
されている。
- ③派生語の分析では、ことわざについても言及し、例数の豊富なことを示した。
- ④日常生活での活用では、多方面にわたり、様々な用例を挙げることができる。ここからも
面積の広い長野県全体を覆う数少ない方言であり、長野県民自身が愛好している様子が窺わ
れる。

キーワード：長野県方言 ずく 語源 語義 派生語 方言グッズ

はじめに

拙稿（注1）をふまえ、長野県方言の代表語「ずく」を対象に、その語源・語義（意義素）・
派生語・日常生活での活用（方言グッズ）等について、総合的に分析・考察する。

1. 「ずく」の語源説

従来の説について、研究者の見解・方言話者の見解の順に検討し、筆者の見解を述べる。

（1）研究者の見解

日本民俗学の開拓者にして日本方言学の父と称される柳田國男に続き、長野県方言研究者と
して著名な4氏の見解を掲げる。

A. 柳田國男 —車の軸・弓の鈚(つく)・直立するもの・背骨—

『國語史新語篇』(刀江書院1936)の「音興味と語形興味」の一節に次のような記述がある。

古い方言集には此語(=ツク:筆者注)の起り説いて、或は車などの軸であらうといひ、或は弓の鈚から出て居るともいふが、それ等の用例をも含めて、ツクは日本では直立するものの名であったことは、杭や柱をツクと謂ふこと、さては濠標のツクシからも推測し得られる。さうして斯ういふ場合の人間のツクは、本来は背骨のことだらうと思ふ。

(引用:『定本 柳田國男集』第十八卷 筑摩書房 1975)

B. 福沢武一 —ズツ(術)ノ意地・根性—

方言語彙の研究は、語源探究に極まるとの持論を持つ福沢は、次のような見解を示している。

①ズクもズツも「術」だ。ズク・ズツは手段・方法である。

(『ずくなし』上巻 伊那毎日新聞社1980)

②ズクネル・ゾクネル・ジクネルという言葉が併用されている。その意味は、通じて「すねる・強情を張る・鶏が卵を抱く」等である。(中略)スネルのも根性があればこそである。よい意味で「やる気」だったのである。

(『伊那市史現代編』1982)

③ズク(根気)とゾクネル・ズクネル等が同根である

(『おいでなんし 東信のふるさと方言集』郷土出版社1988)

この後も、思索は続き、「私のズク理解はまだ完結していない。」(次掲④文献)としつつも、次のように述べている。

④ズクを中心に、ズクナシ・ズクネルにとどまらず、ゾクネル・ジクネルの類を同族・同種に包摂しなくては嘘だ。それら全体に貫通するものは、激しい根性だ。それは燃え立つ気概である。迫力である。

(『北信方言記』ほおずき書籍 2004)

C. 青木千代吉 —骨—

柳田説と関連がある見解を次のように述べている。

ツカは「束(つか)」であり、「束柱(つかばしら)」のツカで、ものを垂直にささえるものことである。それで、「人のからだを垂直に支えるもの=骨」を、古代において「ツカ」と言っていた。そのツカが次のようにヅカとなりヅクと転じた。

ツカ→ヅカ→ヅク そしてこのヅカ、ヅクは次のように

ツカ→ズカ→ズク という音価の語として「骨」「足」という現代方言となった。

ズクの語源は「骨(ずか)」である。そう考えると、「ズクがある」という慣用句は、人間的な骨格がしゃんとしていること、「ズクなし」というのは、「精神・身体的な骨格がぐにゃぐにゃしていること」、「ズクを病む」というのは、「骨惜しみをすること」という意味の一貫性

がはっきりとわかってくる。

(『南佐久郡誌 方言編』長野県南佐久郡誌刊行会1996)

D. 馬瀬良雄 —一定説なし—

長野県方言研究の泰斗・馬瀬良雄は、従来説のポイントを整理し、今後の研究へのヒントを与えている。

青木のズカ説も柳田説と関連を持つ。

ズツ説については、ズクが中部地方以東に、ズツが中部以西に分布する事実を見ると、語源はどうあれ、両語は深くかかわっていると考えられる。この点は今後さらに研究を行う必要がある。(馬瀬良雄『信州のことば—21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社 2003)

E. 沖 裕子 —術(じゅつ)—

日本テレビ系列のバラエティ番組「秘密のケンミンSHOW」(2018. 8. 23)にて、長野県民の「翻訳不能ワード」として、「ずく」が取り上げられた。その語源解説として、沖裕子氏は、以下のような見解を示された。

- ・「ずく」の元は、「術(じゅつ)」ではないかと思われる。
- ・「ずくなし」は、「術ない」から来ていると思われる。
- ・「ジュツナイ(=骨の折れる大変なこと)」→「ヅツナシ」→「ズクナシ(=骨の折れる大変な事に策のない人)

なお、番組内では、長野県民が「ずく」を愛用している例として、県会議事録にもそのまま記録されている例のほか、社是や校歌の歌詞に出てきたり、店名にもあしらわれていたりする例が紹介された(実例は後述)。

(2) 方言話者の見解

市町村誌や研究論文等で示された方言話者(当事者)の語源説を見ていく。

A. 市町村誌

①『龍江村史』(1997)

ズクナシ:「ヅク」尽くすから、根気・努力・勤勉がない

②『富士見町史』下巻(2005)

地理的にも歴史的にも山梨県との関りが深いことから、甲州方言の影響についてとくに考慮する必要があると思われる。

B. 研究論文

中村六郎「ふるさと方言の語源を尋ねて」(『高原の自然と文化』第20号2014・富士見の自然

と文化を守る会〈諏訪郡富士見町〉)

語源については諸説ある。「軸」・「ツク」・「術」・「頭駆」・「尽くす」などその数も多いが、定説はない。柳田国男によれば、「ジク＝軸」、あるいは「ツク」に由来するという。甲州郡内地方のかつては秘境とまで言われた秋山村では、信州のズクと同じ意味内容で「ジク」が日常的に使われている。「ズクを病む」ことを「ジクを枯らす」と言い、「ズクなし」を「ジクっ枯らし」とも言う。植物や農作物をイメージすると、この使い方にはかなり現実味を帯びてくる。私には「ジク＝軸」が語源のように思えるがどうであろうか。

以上、諸説をふまえ、筆者の見解を次に述べる。

貴重な当事者語源説も無視することはできないが、音韻変化の進み方として、「ジク」説には無理があり、福沢氏・沖氏の説く「術（じゅつ）」説を支持する。

2. 「ずく」の語義（意義素）

前稿（大橋2023／^{注1}文献）では、市町村誌・区誌における記述を検討した。そこでの結論は、「根気・やる気」が最も多く挙がり、次いで「精を出して働く（力）・骨身惜しまず働く」であり、他に「精根・熱心・根性」とも説明されていた。

前述の語源説において、語義に触れるものもあったが、この点では、異論がなく、市町村誌・区誌の見解と共通である。

したがって、意義素についても、前稿と同じく「勤労を尊重する気持ち」とすることができると。なお、馬瀬（2003）は、「骨惜しみせず生産・創造活動に立ち向かう気力・活力」としている。

こうした「ずく」が長野県方言を代表する語であり、県民に愛好されている実態は、長野県民に対しての「まじめ」という県外からの評価、県民性に関わるものと言える。

3. 「ずく」の派生語

「ずく」の派生語とともに、「ずく」を用いたことわざについて検討する。

（1）派生語

馬瀬良雄編集代表『長野県方言辞典』（信濃毎日新聞社2010.3）の項目語をもとに列挙する（語義は一部省略して掲げる）。

おーずく＝①細かな仕事の嫌いな気質 [諏訪] [上伊那] [下伊那]

②大きな仕事に向かう気力 [下水内] [南佐久] [富士見]

こずく＝細かなことに気がつき、よく働き、よく動く、「ずく」のある人（県下全域に及ぶ）

ずグ＝精を出してする気力 [乗鞍]

ずく一ぬかす＝①精を出す気力を失う [諏訪] ②力が抜ける [南佐久]

ずく一やむ＝怠ける。骨惜しみする [南佐久] [諏訪]

ずくがある＝こまめで精が出る。骨惜しみをしない [川中島] [東信] [川上] [下伊那]
[千代]

ずくがでる＝精が出る [東信]

ずくがない＝仕事する気力や意欲がない [千代]

ずくがよい＝骨惜しみをしない [下伊那]

ずくがわるい＝やるべきことをやらない。無精なさま [千代]

ずくなし＝①怠け者。気力がない人 (県下全域に及ぶ) ②活力がないこと [南佐久]
③根気がない人 [上田] ④無精者 [南安曇] [山口] [富士見]

ずグなし＝怠け者 [開田]

ずくやみ＝骨惜しみ [川中島] [南佐久]

ずくやむ＝怠ける [開田]

ずグやむ＝怠ける [開田]

ずくをだす＝労を惜しまず精を出して仕事をする [千代]

ずくをやむ＝骨惜しみをする。面倒がる [川中島] [更級] [安筑] [上伊那] [千代]

さらに、市町村誌・方言研究書から例を追加する。

こずけえ＝こずくがある [塩尻] (『塩尻市誌』第4巻1993)

ずくなー＝怠け者 [小谷村・梅池] (『梅池誌』2003)

ズクナシバチ＝見事な巣など作る根気も腕前もないハチ [上諏訪・角間新田]

(福沢武一『信濃太郎 (方言の話)』柳沢書苑1969.2)

このほか、旧制松本高等学校のキャンパスでの学生語を馬瀬 (2003) が紹介している。

ズクマン＝ズクのある学生

ゴンズク＝ドイツ語 gant(ガンツ／とても)より「ガンツ ズクガ アル」→「ゴンズク」
と変化

以上、使用地域を [] で示しているが、「ずく」を知っている県民であれば、初耳・初見でも誤解無く理解できる例が多いと思われる。

(2) ことわざ

和田 登『信州暮らしのことわざ』（しなのき書房2015.5）に、以下の例が挙げられている。

ズクなし隣の御器（ごき）を洗う＝自分の家では、あまり仕事をしないくせに、よそへ行く
と、その家の器などを洗い、ズクがあるように他人に見せて、見栄をはる
大ズクありの小ズクなし＝こまごましたことはなにもせず、のんびりしていたと思ったら、
世間がびっくりするような大仕事をなしとげるタイプ
ズクなしの大カンガラ＝からだが大きくて、大足の人のはあんがいズクなしだ（カンガラと
は、その形が人の足に似ている農具で鋤柄（くわがら）の一種。）
ズクなしの大だくみ＝ろくに仕事もできないくせに、自分の力もかえりみず大きなことを
計画すること。身のほど知らないことの意味
ズクなし豆＝ツルを伸ばさないササゲのこと
コタツは、ズクなし袋＝冬のこたつは気持ちいいので、なにもする気がなくなる

上に挙げた『長野県方言辞典』（2010）によると、「ズクなし隣の御器（ごき）を洗う」は、
下伊那地域に見られる用例である。また、「大ズクありの小ズクなし」と同意の「おーずくがあっ
てこずくが無い」は、県内の方言集に広く収録されている。さらに、類例として『長谷村誌』
（1993）には、「ズクナシノ オーニショイ」（＝ズクのある人なら何度にも分けてやることを、
ズクのない人はためておいて一度に大きな荷をせおうの意）を挙げている。

また、筆者の教室にいた学生（東信出身）が、「ズクナシバコ（＝こたつ）」の例を挙げたこ
とがある。

以上から、「ずく」とともに、「ずく」を出すか出さないかで、多くの用例が展開しているこ
とがわかる。

4. 「ずく」の活用（方言グッズ等）

1980年代以降の用例をジャンルごとに列挙する^{注2}。

■商品名へのあしらい

- 「ずくいらず」（即席みそ汁）[長野市] *
- 「こずくまんじゅう」（和菓子）[長野市] *
- 「ずく出して50年 小川村発足 50年記念ビデオ」（VHSビデオ）[小川村]
- 「ずくもち」（和菓子）[上田市]
- 「ずくっ娘味噌」（調味料）[上田市]

「ZUKU」（トートバッグのロゴ）〔佐久市〕＊

「ZUKU」（缶バッチ）〔佐久市〕＊

「ずくなし人形」（土産物）〔大町市〕

「「ずく」有ります」「ずく無し。」（方言Tシャツのコピー）〔下諏訪町〕＊

■店名

「slowCAFEずくなし」（食品販売）〔長野市〕

「ずくだせ農場」（レストラン）〔上田市〕

■施設名

「ZQ（ずく）」（コミュニティスペース）〔飯綱町〕

■書籍

吉田文子『ずくなしレシピ帳〔信州らくらく料理教室〕』川辺書林1998.3 72p／料理書

どろ『ずくだせおじさん』日本図書刊行会2000.8 206p／小説

吉澤義夫『ズクだせ村びとはばたけ子どもたち〔小さな村の交際交流奮闘記〕』第一企画
2007.12 172p／美麻村における国際交流記

松本市教育委員会企画・監修『ずくだせ！国宝松本城おも城クイズ』松本城管理事務所2014
／クイズ本

SBCラジオ『読むラジオ坂ちゃんのずくだせえぶりでい』しなのき書房2016.7 203p／エッセイ

吉橋通夫『ずくなし半左事件簿』角川文庫2019.9 333p／小説

坂橋克明『読むラジオ坂ちゃんのずくだせえぶりでい続』しなのき書房2019.11 215p／
エッセイ

一歩歩『ずくなし娘』東京図書出版2021.8 325p／エッセイ

■新聞連載のタイトル

「ズクたん」（『信濃毎日新聞』夕刊／連載四コマ漫画）

「ずくだせ信州—わたしの視点」（『日本経済新聞』朝刊・長野版／経済評論）

■テレビ・ラジオ番組名

「坂ちゃんのずくだせえぶりでい」（SBCラジオ／情報番組）

「ずく出せてれび」（SBC信越放送／情報番組）

■組織名

「ずくだせ創造局」(村おこし組織) [小川村]

■イベントのネーミング

「信州ずくだせ落語会」 [佐久市]

「ずくだせ修行」(長野県のキャリア教育事業：高校生向け、夏休みの1週間の就業体験)

「第4回信州学生サミット presents ずく fes」(2017. 11. 11信州学生サミット実行委員会)

「方言スタンプ(ずく(根性))(北信越マイレール事業実行委員会主催「北信越スタンプラリー2017」のまちなかスタンプの一つ)

「ずくだすガイド(身体活動ガイドライン)」(健康増進運動/長野県健康長寿課)

「ずくさち体操」(介護予防目的の市民体操) [東御市]

■標語

「ずく出し! 知恵出し! おもてなし。」(長野県観光部観光誘客課のプロジェクト)

「ズク出して夢に向かって努力します」(長野市PTA連合会・長野市校長会・長野市教育委員会策定「長野市大人と子どもの心得八か条」の第8条目)

「さあ、ずくだして歩いてみましょ」(松本市 街歩きガイド地図のコピー)

「ずくのある じょうぶな子」(長野市立加茂小学校 第二校歌の歌詞の一説)

「“ずく” 出してみんなの夢にLet's try!」(株式会社ミールケアの社是)

■その他

上田市非公認のご当地ヒーロー「六文戦士ウェイダー」のエネルギー源が「ずく」。腰に、「ZUKUメーター」を装着している。

日常生活のいたるところで目にすることができ、県民の愛好ぶりがしのばれる。語形は、「ずく」「ずくだせ」「ずくなし」が主に使われており、他の派生語は、ほとんど登場しない。

おわりに

「ずく」(とともに使用頻度の高い「ずくなし」)は、確かに長野県方言を代表する語ではあるが、他県でも、使われている。

ズクナシ 奥羽では臆病者をののしる語。越後会津の境では、まぬけの意。信州甲州では無精者のこと。もとは、理想の青年男女の美点をズクといった。ズクはツクから。ツクは直立

するもの、枕や柱のこと。人間のツクは、本来は背骨のこと。青森方言で、ズクがイイは、勇気がある意、ズクがナイは、物をする気力がないこと。

(堀井令以知編『語源大辞典』東京堂出版1988)

このほかにも、青森では、「ずくなし雪(=2月に降る雪は、降ってもすぐ消える)」がある^{注3}。また、筆者の聞き取りでも、新潟県上越地域における使用例(「ずくなし(=無精者)」)がある。

今後、このような長野県以外の地域での使用例・使用実態との比較を進めることで、それぞれの地域の特徴をさらに深く考察することが期待できる。仮説だが、他県では、派生語はあまり多くはないのではないだろうか。

なお、これまで、「ずく」(および「ずくなし」)を愛好する長野県民との判断で記述を進めてきたが、「ずく」を知らない新世代が増えているとの実態調査^{注4}もある。継承がなされていくのかについても、関心を寄せたい。

注

1. 拙稿「長野県方言の代表語「ずく」の語義—市町村誌の分析—」『上田女子短期大学紀要』第46号(2023.1) 14p
2. 以下の用例のうち、*をつけたものは、三省堂HP内のコラム「地域語の経済と社会—方言みやげ・グッズとその周辺—」(<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/columcat/>最終閲覧2023.1.6)の中で、画像とともに本稿筆者(大橋)が解説を施している。
3. 川崎 洋『方言再考』草思社1981 p. 47
4. 清水なるな「駒ヶ根市の中学生250人の方言と方言意識」『ことばと文化』8(長野・言語文化研究会)2017 p. 1-14

参考文献(刊行年順)

馬瀬良雄『信州のことば—21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社2003

馬瀬良雄編集代表『長野県方言辞典』信濃毎日新聞社2010

井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美『魅せる方言—地域語の底力』三省堂2013 注2のコラムを書籍化したもの

大橋敦夫「長野県方言の代表語「ずく」の語義—市町村誌の分析—」『上田女子短期大学紀要』

第46号2023

引用文献（引用順）

- 『定本 柳田國男集』第十八卷 筑摩書房 1975
福沢武一『ずくなし』上巻 伊那毎日新聞社1980
『伊那市史現代編』1982
福沢武一『おいでなんし 東信のふるさと方言集』郷土出版社1988
福沢武一『北信方言記』ほおずき書籍2004
『南佐久郡誌 方言編』長野県南佐久郡誌刊行会1996
馬瀬良雄『信州のことば—21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社2003
『龍江村史』1997
『富士見町史』下巻2005
中村六郎「ふるさと方言の語源を尋ねて」（『高原の自然と文化』第20号2014・富士見の自然と文化を守る会〈諏訪郡富士見町〉）
『塩尻市誌』第4巻1993
『梅池誌』2003
福沢武一『信濃太郎（方言の話）』柳沢書苑1969
和田 登『信州暮らしのことわざ』しなのき書房2015
『長谷村誌』1993
堀井令以知編『語源大辞典』東京堂出版1988